

以外のものを思いつくことはきわめて難しい。現代風の「ビッグバン」仮説も問題を解決しているわけでは全くない。ビッグバンの以前には何があったのか、と問えば、問題が単純でないことはすぐに分かる。これは古代人が直面した問題と同じ問題なのである。

我々人間がこの問題を解けるのかどうか、まずそれが問題である。現代の宇宙論はある意味ではこういう問いから逃げることによって成立しているのである。しかし本書を読めば人類の発想はこの数千年の間、基本的には大差ないということがよく分かるはずである。

フランス・ドルヌ+小林康夫著

『日本語の森を歩いて：フランス語から見た日本語学』（講談社現代新書、2005年発行、756円）

————— 工藤 孝史

インターネットの普及、交通手段の拡大と利便性の向上、国際的な交流関係の発達など、現代社会は国境を越えた情報交換を日常的なものにしつつある。どんな手段であるにせよ「国境を越え」ようとする時、人は言葉のちがいの問題に直面する。

古代ギリシャの人々は自分たちの話す言葉以外の「ことば」を使う人々を全て「野蛮人：barbarian」と呼んでいた。中世ヨーロッパの学者たちはラテン語を使っていれば国境を意識せずに済んだ。現代では、英語がある意味で「コイナー・ギリシャ語」や「ラテン語」のような“世界共通言語”的な役割をもつようになったように見える。海外旅行をしようとする人たちの間で「あっちでは英語が通じるの？」なんていう会話を良く耳にする。世界のどこへ行こうが英語さえ知っていれば大丈夫ということだろうか。

「ことば」の国境が、まるで万里の長城のように人々の生活の「内」と「外」を隔てていた時代には、きっと「ことば」は文化や生活様式と切っても切り離せない堅牢な砦であったろう。「国際社会の仲間入り」などという、実質はアメリカ中心主義の代名詞のような言葉が平気で使われるようになった今日の社会は、その意味で「ことば」の堅牢さや頑固さを忘れかけているのかもしれない。

そんななか『日本語の森を歩いて』を読んで思った。「海外旅行」「国際社会の仲間入り」そ

して「国際交流」というスローガン、そんな表面的な現象とは全く別の次元に「ことば」の“国境越え”があるのだと。この次元を切り開くキーワードは、ランゲージュ：langage という F・ソシュールの用語である。

著者は、アントワヌ・キュリオリを師とするフランスの言語学者フランス・ドルヌと表象文化論の小林康夫。序文で「この言語学は、日本語やフランス語や中国語といったそれぞれの個別な言葉 langue がどれほど異なっていようと、そこで行われている関係操作そのものは個別な言葉によらない一般化可能なものであると考えるのです。つまり人間の言語能力 langage 一般のあり方を解明したいと考えるのです」と語るように、著者たちは「発話操作理論の言語学」の立場から日本語を分析している。

人間に共通する言語理解の地平を明らかにしようという試みは、「理性：raison」という名のもとに、既にデカルトやライプニッツといった近代の哲学者たちによって追求されてきた。この問題が「テキスト」の次元を離れて、いわゆる「発話」における概念操作ないしは「関係操作」の問題（スピーチ・アクト）として本格的に扱われるようになったのは20世紀に入ってからのことである。人間であるなら、たとえ違う「ことば」を使っていようと、発話過程では同じような概念操作または（主体と世界との）関係操作を経験しているのではないのか？ そし

て、この操作は langue という規則体系のレベルではなく、発話「行為」のレベルで観察される langage (一般的な言語能力) のあり方として一般化できるのではないかとというのが「発話操作理論の言語学」の基本的なスタンスであろう。

本書は日本語とフランス語の発話操作理論を問題にしているが、この種の試みの対象言語は、もちろんロシア語や中国語でも良いわけだ。公式の言語だけでも 6000 以上あると言われる自然言語のひとつひとつがこの「関係操作」という視点から考察されることによって、もし「個別な言葉によらない」言語の本質が明らかになれば、われわれは、確かに個別的な「ことば」の境界を越えた、新しい地平に立つことができ

るのかもしれない。この地平から見れば、コイネーギリシャ語も、ラテン語も英語も、一個の堅牢な「ことば」のひとつであるに過ぎないということになる。

かつて「言語過程説」を唱えた時枝誠記も、発話に重点を置いた立場から、ある言語にしか通用しない「理論」をもって言語一般の本質であるかのごとき説を唱えるやり方に反対した。確かに個々の言語体系 (ラング) をはなれた「一般言語」なるものの姿は未だ判然としていない。しかし本書の試みのように、言語活動を人間と世界との「関係づけ」という視点でとらえ直して、この関係を発話 (過程) の形式として一般化しようとする研究には、「ことば」の国境を越える大きな可能性が秘められている。

根岸 隆著

『経済学史 24 の謎』(有斐閣、2004 年 10 月発行、2100 円)

●————内山 隆司

本書の著者である根岸隆氏は、1950 年代から 70 年代にかけて理論経済学に対して数多くの重要な貢献を行ったことで知られる世界的な第一級の理論経済学者である。しかしながら、同氏の研究対象は理論経済学のみにとどまらない。80 年代以降、同氏は経済学史研究でも数多くの重要な研究成果を発表してきた。同氏は、理論経済学者としての自らの優れた能力を生かし、現代経済学の分析手法を自在に用いて、過去の偉大な経済学者達の難解で不鮮明な諸学説を合理的かつ鮮やかに再構築してみせる。同氏の学史研究の目的は、こうして合理的に再構築された過去の諸学説が現代的有効性を再び取り戻し、学史家以外の経済学研究者たちの新たな分析道具として再び日の目を見ることである。まさに、「現代経済学のための経済学史研究」が、根岸氏の経済学史研究における一貫したスタンスである。

このスタンスは本書でも変わらない。「経済学

史上の難問といわれるものに現代経済理論の観点から取り組ん」できた著者のこれまでの研究成果のエッセンスが存分に展開される。B 6 版×200 頁ほどの小著の中で、ケネー、スミス、リカード、マルサス、マルクス、クールノー、ワルラス、ジェボンズ、マーシャル等の大経済学者たちの諸学説をめぐる 24 の謎 (章) が取り上げられる。著者の言うように、本書で取り上げられている内容は、これまで著者が国際学術雑誌等に英文で執筆公開した論文 (2000 年以降のものも含んでいる) の日本語版といったものや要約などである。そのため、本書のエッセイ風のタイトルや本文中の平易な語り口、各章 7、8 ページの分量等にもかかわらず、その中身は非常に理論的であり高度であるとともに、極めてエキサイティングである (経済学初心者向きではない?)。

本書には、著者の手による他の日本語の書籍ですでに説明されている内容も再録されている